

煉丹術とは何か

垣内智之

煉丹術と鍊金術

本書では、中国において不老不死を目的として行われてきた営みのうち、丹を作り、その力によって目的を達成しようとした試みを、広く煉丹術と呼びたいと思う。

丹を作る方法は、大きく分けて二通りある。一つは、実際に口から摂取する薬としての丹（丹薬）を作る方法であり、もう一つは、体内において丹に見立てた何ものかを作り出す方法である。

少々矛盾した言い方になるが、後者には、何ものかを作ることなく、自らの身体のなかに、不死となる仕組みを作り上げる様子を思い描く方法も含めるべきだろう。

これらの方法のうち、口から摂取する薬を作る方法を外丹がいたんと呼び、体内において薬や仕組みを作る様子を思い描く方法を内丹ないたんと呼ぶのが一般的である。内丹については、「Ⅱ 煉丹術の経典を讀

む」において詳しく見ていくこととして、ここでは外丹を中心に述べることにしたい。

外丹は、しばしば西洋の錬金術と対比され、主たる目的が、金そのものの作製ではなく、不老不死の追求であった点に中国的特徴があるとも言われるが、実は、作り出した金を財貨として用いるという発想は、中国にも存在した。晋の葛洪かつこうが著した煉丹術の書『抱朴子』ほうそくし（六五頁参照）にも、丹薬について詳しく述べる「金丹篇」のほかに「黄白篇わうはく」があり、黄と白、すなわち金と銀の作り方を、丹薬の場合とは分けて述べている。ただ、そもそも作り方が丹の場合と似通っているうえ、『抱朴子』もさほど厳密に区別していないこともあって、両者はよく混同される。のちに、『諸家神品丹法』びんたんぼう（宋代の成立か）が巻一の大部分を『抱朴子』黄白篇からの引用に充てているのも、その一例である。

不老不死への憧れ

中国において、不老不死を目指した話は実に数多く記録されている。なかでも漢代の歴史家司馬遷が、その著『史記』において、不老不死に心を奪われた二人の権力者の姿を詳しく伝えたことは、よく知られている。

その一人、秦の始皇帝は、紀元前二二一年に中国初の統一王朝を樹立し、諸制度の整備を行うとともに、大規模な土木工事を敢行して国の基盤固めに努めた。だが一方、国力を削ぐほどの財貨を

投入して自らの墓の造営に着手し、壮大な宮殿と強大な軍隊を投影した地下世界を作った。さらには、この世で永遠に権力を握り続けようと、不死身になることを願ったのである。

彼の墓に築かれた地下世界には、川や海を表現するために水銀がたたえられていたと『史記』は伝える。司馬遷の記述には誇張も含まれるようだが、水銀を大量に使用したのは事実であるらしく、始皇帝陵は、地質調査の結果、異常なまでに水銀濃度が高いことが判明している。木材の防菌や殺菌に効果があるという水銀の特性に、肉体の永続という願いを託したのかも知れない。

永遠に生き続けたいと願う始皇帝のもとには、不死の薬が手に入ると吹聴する者たちが集まってきた。東の海に浮かぶ三神山（蓬萊・方丈・瀛洲という名の三つの島）に、不死の薬を持つ仙人がいると説いた徐市は、始皇帝から資金を得て東へと漕ぎ出し、やがて日本にたどり着いたとも言われる。本邦では徐福の名で知られる彼の伝説が日本各地に伝わっており、その墓とされる場所がいくつも存在するのは、始皇帝の薬探しの話が広く知られていた証でもあるだろう。

超越者の形象

だが、そもそも不死の薬など手に入るはずもなく、始皇帝に近づいた妖しげな方士たちは、あれこれ言い訳して時間をかせぐのが常であった。そのうちの一人、盧生は言った。

君主は、時おり身をやつして邪悪な気を避けるものです。邪悪な気が隠れてしまえば、真人がやつて参ります。……真人は水に入っても濡れず、火に入っても焼けず、雲よりも高く昇り、天地とともに長久なのです。今、陛下の天下を治めるあり方は、まだ無欲恬淡の域に達していらつしやいません。

（『史記』秦始皇本紀）

君主たる者、とりわけ武力によって頂点に立った者に、心静かで無欲な振る舞いを求めるなど無理な注文に思えるが、不死身になりたい始皇帝は、かつて自らが用い始めた「朕」という皇帝としての自称をやめ、「真人」と称するようになったという。

その効果のほどはさておき、ここに言う「水に入っても濡れず、火に入っても焼け」ないという超越者の形象は、戦国時代の思想家莊周の著とされる『莊子』の説に基づいている。ただ、『莊子』は「古の真人たちは生きるのを悦ぶことも、死を憎むことも知らなかった」とも説いており、不死であることが理想だと考えていたわけではない。世俗的な価値観に揺さぶりをかけ、争いを繰り返す世の中に一石を投じようと、常識では考えられない存在の一例として真人を挙げたに過ぎない。ところが、盧生はそれを曲解し、不死身の真人が実在すると説いたわけである。

こうした曲解が誰に始まるか定かではないが、不死について語る者たちが、『莊子』の表現を借りるのが常となり、風を操って飛翔する、かかとで呼吸するといった真人の形象が、不死を実現し

た者の姿として、盛んに語られた。そしてその際、単に形象だけでなく、なぜ真人は超越者たり得るのかという理由についても認識が共有されていた点は、注意されてよいだろう。

たとえば季節のめぐりのように、誰も何の作為も加えていないにもかかわらず、おのずとそのようになることを自然（おのずから然る）というが、真人は完全にみずからを自然にゆだねているからこそ、世俗の価値観を超越し、何ものからも自由でいられると『莊子』は説く。真人を目指すのであれば、無欲恬淡でなければならぬと盧生が説いたのも、その論理に従ったからなのである。

探すものから作るものへ

始皇帝の不死願望は、その執着の強さと企ての規模の大きさにおいて、空前絶後と言ってよいが、似た例は彼以前にもあった。東の海に仙人の世界があるという説は、戦国時代から山東半島で語られていたと言われており、不死の薬に関する記述も、秦より前の文献に見いだすことができる。

ともあれ、始皇帝以前の資料から言えるのは、不死の薬は超越者から入手するものと考えられており、自ら作り出すという発想はなかつたらしいことである。これに対して、もう一人の権力者、漢の武帝には、次のように説く李少君が近づいてきたと『史記』は伝える。

竈かまどを祀まつると靈的な存在を呼び寄せられます。そうすれば、丹砂たんさを黄金に変えることができま
す。黄金ができて、それで食器を作れば寿命を延ばすことができます。寿命が延びれば、蓬萊
に住む神仙に逢うことができます。そして、天地を祀る封禪ほうぜんの儀式を行えば不死になれます。

〔史記〕孝武本紀

なんとも手順が回りくどいうえ、やはり神仙に逢う必要があるのだが、注目されるのは、丹砂を
黄金に変化させる操作を介在させている点である。

自然界に存在する金が、中国において、これよりずっと以前から利用されていたことは、出土し
た遺物が雄弁に語っている。やがて金属の精錬技術が進むなかで、人工的な金の作製も試みられる
ようになったらしく、武帝の父である景帝が、人工の金を作った者を死刑に処すという命令を出し
たこと（『漢書』景帝紀）、武帝の時代に、金を作る術について説いた『枕中鴻宝苑秘書』という書
物が存在したこと（『漢書』劉向りゅうきやう伝）が記録されている。

もつとも、できるのは本物の金ではなく、黄金色の合金だったはずだが、李少君もそうした技術
の存在を踏まえて武帝に説いたのだろう。金の食器を作るのと、作った金を服用するのでは大違
いだが、人工物を用いて不死を目指すという点では同じである。どうやら、不死の薬を自らの手で
作ろうとする試みは、この頃から始まったようである。

ところで、現代の我々が人工物と言う場合、プラスチックやセラミックなど、自然界に存在しない物質を思いがちだが、彼らが作るうとしたのはそのようなものではない。自然に存在するものと同じ、いや同じでありながら、自然に存在するものよりもむしろ純度の高いものを作ろうとしたのである。物質は、悠久の時の流れのなかで次第に変化して形づくられるのであり、何らかの事情で変化が不完全だと質の劣つたものが生じると彼らは考えていた。ならば、その生成過程になぞらえつつ、人工的に完全な変化を起こせば、より良質な物質を自らの手で作れると考えたわけである。『抱朴子』の著者葛洪も若き日に、「なぜ世の中にある金銀を服用せずに、それを作るのか」という疑問を抱いた。この疑問に、師の鄭隱ていゐんはこう答えたという。

変化によって作り出した金は、用いた薬物の精髓であつて、自然のものに勝るのだ。

〔『抱朴子』黄白篇〕

人工的でありながら、自然の摂理に合致し、なおかつ自然の物質を超える。矛盾するかに思えるが、これこそが煉丹術を支える発想なのである。

海上の三神山は、潔斎して向かうべき神聖な場所ではあるが、人間世界から完全に隔絶されているわけではない。そうした、言わば人間世界の延長線上に位置する場所に不死の薬があるならば、

不死の薬として自然の産物に違いない。ならば、遭難の危険を冒してまでそこに向かう必要はなく、自然の摂理に従って、自らの手で作り出すことができるはずである。こうした理屈で、不死の薬を作る試みが始まったのである。

丹とは

李少君が金の原料として提示した丹砂は、丹薬を煉る原料のなかでもとくに珍重されたものである。

玉石部上品

丹砂



図1 丹砂 (『図経衍義本草』)

る。丹砂は、硫化水銀からなる鉱物で、結晶が鮮やかな赤色をしていることから、生命の維持に不可欠な鮮血を象徴すると考えられたこともその一因と言われる。また、この物質は朱色の顔料の原料として古くから用いられていた。朱塗りの木材が、無垢の木材より長持ちする様子を見れば、そこから、長生に役立つという発想が生まれても不思議はないだろう。

それだけではない。丹砂に火熱を加えたときの反応も、煉丹家を魅了した。『抱朴子』にも、「丹

砂は焼けば水銀となる。水銀は変化を積み重ねれば丹砂に戻る」(金丹篇)とあるように、丹砂は、いったん水銀に変化させた後に、再び丹砂に戻せると信じられたのである。

そもそも丹薬を煉る際に、植物性の原料よりも鉱物が重んじられたのは、火に入っても焼けない属性を自らの身体に獲得するのに役立つと考えられたからであった。しかし、火に強ければそれでよいわけではなく、変化を起こすことも重要な要素であった。

丹砂に火熱を加えると、水銀が蒸気となって大気中に消えていく。この様子を見た煉丹家たちは、天界へ飛翔する真人の姿をそこに重ね合わせた。さらに、この蒸気を捉えて冷却すれば水銀が得られる様子を見て、丹砂は消えたのではなく、火に負けることなく姿を変えたと考えたのである。

では一方の、水銀から丹砂に戻す操作とはどのようなものであろうか。実は、これについてはわからないことが多い。

丹薬を煉る手順について、材料の種類や分量、容れ物の大きさや燃料の種類、それに火加減や加熱時間など、実に細々とした決まりを記した文献が数多く存在する。二十世紀になって、これらの文献に書かれた手順が、果たして科学的に考えられたものであるかどうかを検証する取り組みが行われるようになった。なかには、実際に鉱物を用いて実証実験を行い、その変化を確かめる研究者も現れた。そして彼ら研究者は、水銀から丹砂に戻すことは科学的に不可能であることを確かめた

うえで、こう結論づけた。水銀を空気で加熱すると酸化して赤い層ができる。この赤い層は、実際は酸化水銀なのだが、煉丹家たちはその色を見て、丹砂に戻ったと誤認したのでろう、と。

現代科学の見地からすれば誤認にすぎないとしても、丹砂が、いったん変化させても元に戻る力を有していると感じたとき、煉丹家たちが驚喜したであろうことは想像に難くない。

（丹砂から作った丹葉に）元かえに還る力があるからこそ、老いた者を壮健かえに戻し、死者を復活させ、枯れたものを茂らせ、瓦礫がれきを極上の宝に作りかえることができる。その神聖な力は、なんと偉大ではないか。

『諸家神品丹法』卷一所引『金丹龍虎経』

およそ人は、生まれるとすぐに死に向かう道を進み始める。持つて生まれたみずみずしい生命力は徐々に失われ、逆に、死を招く要素が、徐々にまとわりついてくる。それゆえ、死に向かう流れから逃れるには、失われていく生命力を補い、減じることのない強靱な肉体を得るために何かを撰取することも必要だが、同時に、死を招く要素を取り除き、生命力のみなざる状態に還ることも重要だと考えられた。いったん姿を変えても元に戻ることができる丹砂が、死を招く要素を取り除くのに役立つと信じられたからこそ、不死の薬を作る材料のうちで丹砂が最も重要だという見方が、不死を目指す人々の間で長きにわたって広く共有されたのである。